

好奇心おうせいな少年時代

佐野さんは、明治二十二年（一八八九）三島の久保町、今の中央町に生まれました。お父さんの米吉よねきちさんは「秋月」という和菓子屋を営み、その独創的な菓子は評判だったそうです。小さなころから利発で努力家、好奇心にみちた少年でした。南小学校からにらやま葦山中学校（今の葦山高等学校）へ進み、化学の勉強を志して東京高等工業学校（今の東京科学大学）へ進学しました。



勉強にはげむ隆一少年

創造力で新製品を開発

社会人になると、学校で研究した応用化学を生かして、さまざまな発明をしました。



加藤與五郎先生の言葉を思い出して…

佐野さんの研究・開発のモットーは、工業学校の恩師、加藤與五郎先生よとごろうからさずけられた、「決して人まね、物まねしない」でした。その当時無理だといわれ、使い道がないと思われていた原料を使って、「だれも本格的に取り組まないからこそ、ねらいめなんだ」と、実際に使える製品をつくりました。フェロアロイ（合金鉄）ごうきんてつがその一つです。鉄に含まれる不純物の除去や、鉄の特性を高めるために、添加てんかされます。

化学工業界のリーダーへ

大正十四年（一九二五）に鐵興社てつこうしゃを設立、その後、日本石英硝子社、プラス・テク社、日本カーボン社、東邦アセチレン社など十社近くの会社をつくり、ガラス管、プラスチック、ハロンガスなどを製造しました。佐野さんは、こうして日本の工業の発展に貢献し化学製品開発のリーダーとして活躍しました。



会社での記念講演で後輩に語りかける

美術品に先人の知恵をみる

佐野さんは一日の忙しい仕事が終わりに、家でくつろぐとき、自分で集めた古い美術品をながめるのを楽しみにしていました。お父さんの米吉さんも骨董品こつどうひんを集める趣味人でしたが、佐野さんにとって美術品収集は「昔の人々の知恵や工夫を学び、仕事に生かすため」でした。資源の少ない日本ですが、日本人は少ない資源を工夫して役立つものをつくりだす力にすぐれていたからこそ、世界でも有数の工業立国になったのです。



眼光鋭く刀を鑑賞

佐野さんの集めたコレクションは、日本画や中国・朝鮮の陶磁器、仏像など、様々な種類がありますが、佐野さんは、とくに日本の名刀を鑑賞するのが好きでした。鉄のかたまりを、人間の手によって鍛え上げ、究極の曲線美に仕上げた刀。佐野さんが刀をみるときにそこには技術者としての厳しい目もあったに違いありません。

佐野美術館を設立



佐野美術館開館の日、来館者に作品解説

ててくれたふるさと三島以外にはありません。市民がいつでもよいものを見られるように、また、これから社会にでて活躍する子どもたちのために。よいことと思うとすぐに動く、佐野さんは不言実行の人でした。

ふげんじつこう

佐野さんは喜寿（七

きじゆ

十七歳）になったとき、

集めた美術品を寄附す

ることにしました。場

所はどこにしようか考

えましたが、自分を育

こうして佐野さんは、両親のためにつくった三島市中田町

の広大な日本庭園の一角に美術館を建てました。昭和四十一年（一九六六）のことでした。三島市はこの前年、多くの業績

や貢献をたたえて、佐野さんに名誉市民の称号を贈りました。

日本の社会の発展を常に考え、郷土への愛につくし「三島

のお父さん」と呼ばれた佐野さんは、昭和五十二年（一九七七）、

八十七才の生涯を閉じました。

佐野さんのことば

佐野美術館の開館当時から学芸員をしていた渡邊妙子さんには、美術品のコレクションを整理していたときに佐野さんが話してくれた、忘れられないことばがありました。

美術品は一つ一つ箱に入っています。箱には前と後ろがあります。箱の前をそろえてきちんと整理する。一つでも曲がって置けば、すべてが曲がってしまいます。一つをきちんとまっすぐに置けなければ、仕事もきちんとできません。



自分の集めた美術品に囲まれてくつろぎのひととき

また、会社の後輩や友人に、よく話していたことばがあります。

種をまかないでは何もかも生えない。種をまくというこ
とは、行動を起こすことである。そこから失敗の芽が生
えたら、かりとればよいし、成功の芽が生えたら、肥料
をやればよいのである。

私は、自分の過去において、実際に何回かの失敗を、若い
時代にくりかえしている。だから私は、成功は、失敗から
しか生まれないと考えている。先見の明（先を見通すこと）
も、ここから生まれると思って、まちがいないのだ。

佐野さんは、集めた美術品から昔の人の知恵をたくさん
学びました。佐野さんは、ふるさと三島の子どもたちが、
佐野美術館にある美術品から新しい発見をして、立派な人
材が育ってくれることを願っていました。

そんな佐野さんの願いを今に伝えるため、佐野美術館で
は毎年、コレクションを公開し、さまざまな展覧会を開い
ています。

佐野隆一 略歴

明治22年（一八八九）	8月1日	静岡県三島町に生まれる
明治43年（一九一〇）	7月	東京高等工業学校応用化学科卒業
明治43年（一九一〇）	8月	横浜製糖株式会社技師
大正5年（一九一六）	9月	中村化学研究所技師
大正14年（一九二五）	3月	合資会社鐵興社を創立し代表社員となる
昭和12年（一九三七）	12月	日本石英硝子株式会社取締役社長
昭和14年（一九三九）	12月	株式会社鐵興社取締役社長
昭和26年（一九五一）	12月	プラス・テク株式会社取締役社長
昭和28年（一九五三）	5月	日本カーボン株式会社取締役社長
昭和30年（一九五五）	2月	東邦アセチレン株式会社取締役社長
昭和40年（一九六五）	4月29日	勲二等瑞宝章を受ける
	11月8日	三島市より名誉市民の称号を受ける
昭和41年（一九六六）	2月11日	財団法人佐野美術館を設立
昭和47年（一九七二）	11月	財団法人佐野美術館理事長
昭和52年（一九七七）	5月29日	東京都世田谷区弦巻の自宅にて逝去 享年87
趣味：美術品の収集、庭づくり、囲碁（日本棋院六段）、将棋		
正四位に叙せられ、 勲二等旭日重光章を受ける		